

会員紹介：落合直之さん

私の略歴



1963年横浜市生まれ。1988年に明治大学政治経済学部政治学科卒業後、国際協力事業団（JICA：現国際協力機構）入団。以来、東南アジア地域、中東地域、平和構築、ジェンダー、鉱工業、企画、調達、安全管理を担当する本部部署や海外事務所（フィリピン、ヨルダン）に勤務。その間、2003年に法政大学大学院政治学研究科政治学を修了。在フィリピン日本大使館一等書記官を経て、ミンダナオ国際監視団（IMT）シニア・アドバイザー、JICA バンサモロ包括的能力向上プロジェクト総括を歴任し現在、バンサモロ自治政府首相アドバイザーに従事中。

従事した仕事の内容

駆け出し時代からフィリピン事務所[1991-1998]

私は1991年にJICAに入った。最初の配属先である鉱工業分野の技術協力プロジェクトを実施する部署で、国際協力と職業人のイロハを徹底的に仕込まれました。別の言葉で言えば、雑巾がけの日々でした。1994年にフィリピン事務所に赴任した私は、開発協力のプロフェッショナルとしての師匠となる方（事務所次長）に出会いました。駆け出しの頃の私は、課題をあまり整理分析せずに、とにかく上司に伝えることが先決とばかりに、「あの件ですが・・・」と報告していました。するときまって「だから？」と問い返されました。事実を伝えるだけであれば録音機でも出来る。担当者であるからには、整理分析の上に「こうすべき」という担当者なりの方針を上司に相談することを求められました。いつしか次長の反応は「だから？」から「まだ、甘いな」になり、「お、それ良いかも」、「よし、それで行こう」に変わってきたのが嬉しかった記憶があります。

1994年10月。私はフィリピンの南部にあるミンダナオ島ダバオ市に降り立ちました。フィリピン事務所に着任して、初めての国内出張。当時のダバオ空港は今とは比べものにならないくらい小さく、フィリピンの何処にでもある典型的な地方空港の一つでした。マニラより赤道に近い分太陽から降り注ぐ光はさらに眩しく、私の顔を容赦なく照らしました。このとき私は、これからミンダナオとの長い付き合いが始まるとは、ひとかけらほども想像していませんでした。

1996年のフィリピン政府とモロ民族解放戦線（MNLF）の和平合意締結直後には、JICAとして何ができるのかを関係者と相談するため、幾度となくミンダナオ島の紛争影響地域の中心にあるコタバト市に赴き、ミンダナオ紛争問題の解決にかかわるようになりました。当時はまだまだ治安が不安定であったので、多くの国軍兵士の護衛付きでの訪問

でした。

開発と紛争、そしてイスラムを学ぶ[1998-2010]

1998年に帰国後、開発と紛争の関心に興味を抱き、法政大学大学院で政治と平和について学び修士号を取得しました。その後、フィリピン事務所勤務を希望しましたが、赴



ヨルダンのワディ・ラムにて

任先は中東のヨルダン事務所でした。2003年のことです。アラブの国にはそれまで出張でも行ったことはなく、正直戸惑いました。アラビア語は喋れず、アラブ文化に対する理解もありませんでした。結局、JICAヨルダン事務所に4年弱勤務し、その間どっぷりとイスラム世界に身を任せました。モスクの真向かいに住んでいたため、日に5回、大音量で流れるアザーン（コーランのお祈りの声）を浴びる毎日。ヨルダンで

イスラム教に真正面から接し、イスラム教徒と仕事や娯楽を共にしながら多くを学びました。振り返れば、ミンダナオのイスラム教徒の輪の中に自然に入っていけるのも、この経験が大きかったです。

ミンダナオの現場 [2010-2021]



ミンダナオ国際監視団本部メンバー
(前列右から二人目が筆者)

初めてのダバオを訪れてから16年後の2010年。私はフィリピン政府とモロ・イスラム解放戦線(MILF)との停戦合意や社会経済開発をモニタリングするマレーシア、ブルネイ、インドネシア、リビア、ノルウェー、EUそして日本から構成される「ミンダナオ国際監視団(International Monitoring Team in Mindanao; IMT)」に、在フィリピン日本大使館一等書記官として派遣(出向)されました。IMT勤務は自ら志願しました。ミンダナオ支援の最前線で働きたいとの思いはもちろんですが、

子どものころから慣れ親しんできた団体生活への適性を踏まえてのことです。また、一介の開発援助ワーカーとして、和平合意が達成される前から、社会・経済開発支援を行う試みに挑戦してみたいとの思いもありました。

JICA 人生の半分はフィリピン就中ミンダナオ[現在]

私はマニラのJICAフィリピン事務所で働いた4年間と、その後JICA本部のフィリピン担当課に在籍した7年間、そしてミンダナオ国際監視団社会経済開発シニア・アドバイザーとJICAバンサモロ包括能力向上プロジェクト総括としてミンダナオ島コタバト市に駐在した5年間の合計16年間に、フィリピンを隅々まで訪れました。北はルソ

ン島北端の町アパリから、南はマレーシアが目と鼻の先にある南端の島タウィタウィまで。ミンダナオ島内もダバオを初めとして、ジェネラル・サントス、カガヤン・デ・オロ、ブツアン、コタバト、パガディアン、ザンボアンガといった主要都市のみならず、海岸沿いや山岳地、湿地帯から離島に至るまでの名も知れない多くの町や村を駆け巡りました。私の JICA 人生の半分は、フィリピンと共にあります。「愛と気合いと想像/創造力」をモットーに、ひたすら現場を這いずり回る。「地べた派」を自称しています。



フィリピン国軍とモロ・イスラム解放戦線の兵士たちと

今また、フィリピンに赴任しています。今回の任務は、2019年に発足したバンサモロ自治政府の首相アドバイザー（JICA 専門家）です。フィリピンは大統領制を敷く国家ですが、バンサモロ自治政府は議院内閣制を導入した。長きに亘った内戦の解決方法が、一国二制度による自治政府の設立です。ミンダナオが再び紛争の状態に戻らないように努めるのが私の任務です。

仕事上の苦勞と喜び

JICA に勤めて 30 年が経ちます。その半分がフィリピン・ミンダナオと書きました。では、もう半分は何かと言いますと、本部内の多岐に亘る部署で勤務しました。平和構築、鉱工業、ジェンダー、貧困削減といった分野・課題を担当する部署、企画、安全管理、調達といった組織を支える部署、そしてヨルダン事務所です。

開発支援事業の発掘・形成・実施監理・評価にかかわる、一連の PDCA に基づく事業サイクルを通じて、事業とは「生きもの」であることを痛感しました。生きものを生かすも殺すも、それに携わる「人（知識、技術、思想など）」次第であり、また基盤となる「制度」が適確に構築されている必要があります。JICA 本部での様々な部署での経験は、人と制度の重要性に基づく多様な事業展開能力を磨くこととなりました。

事業にかかわる以上は、出来る限り相手の近くでかかわりたい、その様な思いが高じて、停戦監視団要員や JICA 専門家として「現場」での活動にも従事して来ました。現場は正に、生きものが縦横無尽にうごめく世界です。驚きと感心、喜びと少しの落胆に満ち溢れています。開発協力に携わる者として、現場目線で何かに貢献出来れば嬉しいと思う日々です。

私の生き方

“I am the master of my fate. I am the captain of my soul.”。 William E. Henley の詩「INVICTAS」の一節を、胸に刻んで生きています。ですが、なかなか現実はそのようには行かず・・・。